

武道人口の減少と同時に、職人人口の減少、すなわち技術力の衰退という問題に直面する武道具業界、中でも剣道防具業界においては、海外で生産された安価な防具が蔓延し、従来の流通構造をすら変貌させるまでに至り、近年では業界内においても懸念の声が広がっていることが明らかとなった。しかし、各小売店・企業も、手に持っていた技術力の保持と次代への教育・継承作業を放棄してしまい、昔ながらの職人の伝統技による武道具を主流にすることは、10年20年では叶わない。

このような状況下において、一般スポーツ用品業界の小売店同様、近年の少子化に悩まされるとともに、ネット販売の低価格競争に巻き込まれるなど、売り上げの低迷を嘆く武道具小売店は、技術力を自分の手に取り戻す必要性に気づくとともに、学校や道場などの「地域」との信頼関係を重視した営業を行うことで、業界復興の鍵となる経営基盤を築きうる可能性を秘めているのではないだろうか。

## ライフヒストリー法を用いた地理学研究における地域叙述

### —社会学のモノグラフ『都市の日本人』の考察より—

高野 萌

本研究では、ライフヒストリー法を用いた地理学研究に注目し、極めて個人的な情報を、プライバシー保護を考慮しつつ地理的理想力豊かな地域叙述へと昇華させるための工夫について、社会学のモノグラフ『都市の日本人』(R. P. ドーア)を分析し、検討した。

ライフヒストリー法とは、社会学の分野で生まれた、個人の経験から社会や文化の諸相を読み解こうとする調査手法であるが、近年地理学においても研究が蓄積されている。しかし、導入する場合、リアリティを追求して地域叙述を詳細にする程、調査対象のプライバシーを損なう危険性が高まるというジレンマが存在する。この問題に対して、文学作品や地図表現など多方面からの検討が期待されているが、本研究では、その一つとして社会学のモノグラフの分析による考察を行った。

『都市の日本人』は社会学研究に位置付けられるが、特定の近隣集団を調査対象としている点で地理学研究と共通する一方、地域叙述は類型化を目的に行われており、地域を特定する表現が避けられている。故にある種のライフヒストリー法を用いた地理学研究として捉え

る可能性を検討した。方法論は、地理学研究と社会学研究の境界面について論じているハーヴェイ(1980)とNystuen(1963)を採用した。『都市の日本人』における地域調査の中に、地理学調査としての側面を見出し、架空の名称であっても、実在する現象を記述等によって絶対・相対的参照すること／住居や道路、川などの物理的な要素の形態や配置がもたらす空間的効果に注目すること／方向や距離といった地理学的視点を含む概念を用いること、によって、地理学的想像力を喚起することが確認できた。

ライフヒストリー法は、特定の地域や場所を対象として研究を行ってきた地理学にとって、いかにプライバシー保護を考慮しながら研究を蓄積するかという重要な問題を提示している。今後も様々な視点からの考察が行われることで、こうした問題に一石が投じられていくことが期待される。

## 「外国につながる」子どもにとっての“Place” —東京都板橋区の多文化共生政策と学習支援活動における

## フィールドワークからー

谷口 博香

近年、グローバル化が進み、日本においても多くの外国人が地域社会に存在するようになってきている。しかし、家庭の事情や経済的理由、地域による理解の不十分から、生活世界において自らの「場所」を見つけれない子どもたちの問題が顕在化している。

本研究では、ヨーロッパ及び日本における移民政策を比較したうえで、近年外国人人口が増加している東京都板橋区をフィールドとし、「外国につながる」子どもたちに焦点を当てた。そして彼らと場所構築、及びそれを支えるエージェントとして自治体とNPO団体に着目した。

「場所」をめぐるのは、1970年代以降、人文主義地理学者をはじめ、様々な立場からの見方が提示されている。私自身はそれらの議論を踏まえ、クレスウェル(2004)による、特に人間の意味付けが重要な“Place”の概念を重視した。そして私自身はその要素として、①ある程度限定的な空間スケールであること、②フィジカルな要素、③自己主張と承認の相互作用を伴う人間関係の存在、④その関係性から生まれてくる連帯感やその場所に対し

ての帰属意識の存在を挙げ、板橋区役所への聞き取りやNPO団体「子どもLAMP」の支援活動での参与観察やアンケート、聞き取り調査をもとに分析した。その結果から、「外国につながる」子どもたちは、移住先の地で出会った人々と関係を築き、精神的な充足感を得るというプロセスを経ることで、そこが具体的な記憶のある生活空間となり、上記のような要素から形成される場所への帰属意識を持つようになると考えた。

日本に来る「外国につながる」子どもたちの背景・事情は多様化している。よって、彼らにとっては、個々の差異や多様性、価値観が受け入れられる、多義的でダイナミックな「場所」=“Place”が形成される必要があるのである。そして、家庭や学校、地域、自治体などが相互に関わり合ってサポート体制を整備し、「日本人」/「外国人」という二元論な思考ではなく、1人の人間としての人権を保護するという視点を持つことが重要であり、これは今後多文化共生に向けた日本社会の課題となるだろう。

## ノマドという流行ー場所からの自由を求める人々ー

松本 麗

近年新しい働き方、ライフスタイルとして「ノマド」という言葉が注目されている。「ノマド」とは、遊牧民を指すnomadeからきた言葉であるが、現代の自由に移動しながら働き生活する人々を指す。彼らは、「場所から縛られずに自由に移動する」ということを強く主張している。そこで、本研究では、なぜ今ノマドが注目を浴びているのかという背景に加え、ノマドにとって場所はどのような意味を持つのか、ノマドとはどのような存在なのかということについて考察する。

ノマドの著書である『ノマドライフ』(本田 2012)『自由であり続けるために20代で捨てるべきこと50』(四角 2012)『仕事をするのにオフィスはいらない』(佐々木 2010)を分析対象とし、テキストマイニングの自然言語処理の一部を使い、ノマド流行の背景、ITとの関連性、ノマドと場所の関係性について分析を行った。

分析の結果、テクノロジーの発展がノマドの流行を支えていることはもちろん、時代の変化や経済の停滞により、人々のモノの所有に対する価値観が変化していることを背景に、家などの場所さえもモノとしてとらえているノマドにとって、場所は切り離していく対象であると考えられていることが明らかとなった。

また、場所からの自由を求める彼らであるが、実際には、自らの意志で選んだ拠点を中心に、その時々で最も心地よい場所を探して移動をしている。したがって、ノマドとは場所から離れて自由になることではなく、「自ら最適な場所を選択して移動する」存在なのである。

地理的選択は、長期にわたりその人の人脈や文化、情報などに影響を与えるため、ノマドとして生き残っていくためには、住む場所、働く場所といった場所の選択の重要性を意識していかなければならない。今後ノマドが